

<日本レジャー・レクリエーション学会第43回学会大会

地域研究報告 於：東北福祉大学>

地域研究「<sup>わたり</sup>亙理、<sup>ゆりあげ</sup>荒浜から<sup>開上</sup>『もう一度 心をひとつに』」報告

田中伸彦<sup>1</sup>

Report on Regional Study at Watari, Arahama and  
Yuriage District, Miyagi Prefecture

Nobuhiko Tanaka<sup>1</sup>

1. はじめに

本年度の地域研究は、例年とはやや異なるスタイルで行われた。

例年の地域研究では、当日現場に直接集合し、ある特定のトピックについて、半日丸々時間をかけて、その場でディスカッションするスタイルをとっている。しかし今回は、現場ではなく開催校の東北福祉大学に集合した。そして学内のホールで1時間程まとまった講演を聴いてからバスで現場に移動した。具体的に書くと、午後1時から2時まで、村井嘉浩宮城県知事のビデオメッセージと宮城県危機管理監の石森建二氏による特別講演を拝聴した後に、そこで得た知識や思いが冷めないうちに現地を訪問するというスタイルであった。そのため、例年よりは滞在時間が短くなったものの、明確な問題意識を携えて地域研究に臨むことができた。

地域研究のテーマは東日本大震災である。東日本大震災は2011年3月11日に発生した。今回の地域研究は2013年11月8日に行われたので、大震災から2年8ヶ月が経過していたことになる。もう2年8ヶ月経ったのか、それともまだ2年8ヶ月しか経っていないのか、受け取る印象は、人や地域によって異なるのだと思う。

一言に被災地といっても様々である。震度6以上の大きな揺れに見舞われて被害を受けたものの、再建がほぼ終わり、今では震災前と変わらな

い生活を行っている地域もあれば、原発事故の放射能の影響で元々住んでいた地域に帰ることすら、いまだままならない地域もある。今回巡検させて頂いた津波に見舞われた地域では、瓦礫等の撤去が進み、交通基盤も整えられつつあるので、地域に立ち入ることに支障は少ないのであろうが、この地に何を残して何を变えるべきなのか、ここで再びどの様に生活を再開すべきなのか、あるいは今後防災対策を踏まえたまちづくりをどの様に進展させていけばよいのかについて、一筋縄では合意に至ることは少なく、地域ごとに手探りの復興が続いているのが実態である。

本学会では、東日本大震災に対して、震災直後から多くの会員が被災地で活動を行ってきた。ある者は救援活動や介護/支援活動を、またある者はスポーツ交流活動や街やコミュニティの再生などに取り組んできた。また、学会という「組織」としても、震災対応特別委員会を分野横断的に立ち上げた。そして、現場におけるレクリエーション活動をどの様に支援するのかという実践的な内容から、日本人の価値観が大きく変動する中における余暇のあり方を根本的に問い直すレジャー論に即した議論まで、限られた人数の中での限界は否めないが、本学会ならではのトピックを中心に、日々取り組んできたつもりである。

その様な中で、学会大会が被災地の仙台市で開催されることになった。今回の地域研究は、震災

から2年8ヶ月経過した時点において、学会として何ができたのか、今後何をしなければならないのかを改めて考え直す非常に貴重な機会になったと言えよう。

今回の地域研究は、1台のバスを借り上げ、東北福祉大学子ども科学部の駒野敦子准教授の引率のもと、地域の語り部で『閑上復興だより』の編集長でもある格井直光氏にお話を伺いながら、20余名の参加者を得て遂行された。なお、表題には「亘理、荒浜から閑上」とあるが、限られた時間の中で効果的に現場を巡検するために、訪問地を名取市内の閑上地区に絞った。訪問地は4カ所で、来訪順に、「閑上日和山（富主姫神社/閑上湊神社）」、「ゆりあげ港朝市/メイプル館」、「閑上中学校」、「閑上まちカフェ」であった。

## 2. 閑上とは？

閑上とは、宮城県名取市の北東の角にある港町の名前で「ゆりあげ」と読む。地区の北部を流れる名取川を渡れば、仙台市（若林区）である。

閑上地区は、江戸時代よりも前から栄えてきた歴史ある港町である。伊達政宗公の命でつくられた「貞観運河」を使って米や魚介類を運び、仙台市街と太平洋の海路とを結ぶ交通の要所として発展してきた。近年（震災前）は、海岸沿いに各種スポーツや海水浴が楽しめる「ゆりあげビーチ」を整備し、その傍らの閑上漁港では朝市が開かれる活気のある町であった。そして、漁港から少し内陸に入った地域には住宅地が広がり、更にその背後に広大な水田地帯が広がる景観を呈していた。

しかし、津波によって多くの住居や施設が流れてしまった。そして約7,000名いた住民の1割以上の方々が犠牲になったとのことである。被災後2年8ヶ月経過した今でも、かつての景観は復元されていない。

そのため、我々のような他地域から初めて訪れた人間には、眼前の景観から地域の歴史を読み解くことはできない。更にいえば、将来閑上の人々が、この地でどのようなライフスタイルを築けば幸福になれるのかを考えるのは容易ではない。

その様な我々は、閑上に長年住み、この場所を深く理解する方から解説を受ける必要がある。そ

こで語り部の格井氏に話を何う意義が出てくる。今回の地域研究では、格井氏から、閑上の人々がどのような思いで現在暮らしているのかを語って頂くとともに、それに対してレジャー・レクリエーションという学問に何ができるのかを、会員同士で検討することになった。

以上の前提を共有して、参加者一行は、まず閑上地区を小高い場所から俯瞰できる日和山（富主姫神社/閑上湊神社）へと向かった。

## 3. 閑上日和山（富主姫神社/閑上湊神社）

閑上日和山は、海岸から700m程度入ったところに造られた標高6.3mの人工の山である。そして標高があるわけでは無いが、ほぼ平坦な地形で構成されている閑上地区の中を歩くと、小高く盛り上がった閑上日和山に生えるマツの木や神社の祠が我々の目に飛び込んでくる。建物が流失し、瓦礫がほぼ撤去された現在、この山は地域のランドマークとしてひととき目立っていた。

我々はその閑上日和山に登った。すると360度の展望が開け、閑上地区のランドスケープの全貌を把握することができた。山の上で我々は、格井氏に用意頂いた震災前の展望写真などを併せ見ながら、閑上地区のかつての町の構造や津波被害の概要などについて説明を受けた（写真1）。

私にとって、閑上日和山から見下ろした景観は、あたかも広大な造成地のようにであった。かつての閑上地区の様子を知らない私にとっては、この景観は昭和期の大規模ニュータウン開発地の印象とどうしても重なってしまう。しかし、ここはニュータウンではない。津波で表面上は流されているが、深く長い人間の歴史が刻まれている場所なのである。

人間には、人間として人間らしく過ごすことができる空間・環境が必要である。その空間・環境を如何に取り戻していくべきなのかを現実に即して考えることの重要さと困難さを、語り部格井氏の解説を通じて再認識した次第である。

## 4. ゆりあげ港朝市/メイプル館

続いて我々は、日和山から数百メートル離れたところにある「ゆりあげ港朝市」を訪れた。この朝市は、被災地となった閑上地区の中で、仮設の



写真1 閑上日和山で格井氏の語りに聞き入る参加者



写真2 木造ですっきり明るいメイプル館

店舗ではなく本設で営業を再開した最初の商業施設だそうである。海のすぐ近くに本設の市が立つということは、海に向き合い復興するのだという地元の人々の強い意思を示す象徴となる建物ではないかと思われた。

閑上の朝市は日曜・祝日の午前で開催される。そのため、金曜日の午後に来訪した我々は、残念ながら多くの人で市が賑わう風景を見ることは叶わなかった。しかし、木造の建物が通りを挟んで長屋風に遠くまで立ち並んでいる様子から、活況を呈し続けている朝市の歴史と、その復興に向けた関係者の情熱を推し量ることが可能であった。

また、朝市が開かれなかった時間帯に来る訪問者のために、朝市会場の横には、木造の美しい「メイプル館」が建てられている。メイプル館でも、朝市で取り扱っている海産物を一部取り揃え、他にも地元のお菓子や、仮設住宅で製作した手芸品などを販売していた（写真2）

メイプル館は、カナダの木材をふんだんに使用している。この建物を寄付してくれたのはカナダ政府で、カナダの国旗にもなっているサトウカエデ（メイプルの木）にちなんで「メイプル館」名付けられたとのことである。実のところ震災前には、閑上地区とカナダと間に深い親交は無かったとのことである。互いを知る/知らないにかかわらず、被災者に役立ちたいというカナダ政府の心持が新たな繋がりを生み、閑上の地でメイプル館として実を結んだという事実に、我々は非常に感心させられた。

## 5. 閑上中学校

続いて我々は、バスで内陸の住宅地に向かい、閑上中学校を訪れた。津波の際には多くの人たちが避難して命を救われた閑上中学校であるが、同じ津波で14名の尊い生徒の命が犠牲になっている。

訪れた校舎は現在使われていない。いまだに津波の痕跡を残しており、校内の大時計は地震発生時の2時46分を指したままであった。

現在、校舎の前には被災1年後に建立された慰霊碑を見ることができる。その慰霊碑の前で、震災時の避難の状況や震災後の慰霊活動など、風化させずに記憶に残しておかなければならない話を、格井氏に語って頂いた（写真3）。

## 6. 閑上まちカフェ

最後の訪問地として、我々は「閑上まちカフェ」



写真3 閑上中学校慰霊碑の前で語りを聴く参加者

を訪れた(写真4)。ここは、閑上のこれからのまちづくりを考える人々が集うカフェである。ゆっくり落ち着ける自宅や喫茶店などを失った閑上地区の人々が集える居場所を再建・確保し、これからのまちづくりについて、住民の考えを集め、発信する場として、このカフェは運営されている。住む場所を失い、バラバラになった人々が閑上に戻ってくるための、未来にむけたまちづくりを、日々スタッフの方々は語り合っている。カフェでは、未来の閑上を描いた図面を見せて頂いたり、閑上の将来に向けた各種活動を紹介する地域誌『閑上復興だより』を頂いたりした。

また、ちょうど来訪時にカフェではキャンドルづくりが行われていた。このキャンドルの売り上げは閑上地区の将来に活用されるということである。たとえその様な前提が無くとも、このカフェでつくられるキャンドルはとてもカラフルで美しくかったこともあり、多くの参加者がお土産として大小様々なキャンドルを購入して帰った。

## 7. おわりに

以上、今回の地域研究では、「閑上日和山(富主姫神社/閑上湊神社)」から町を一望し、「ゆりあげ港朝市/メイプル館」で町の復興への強い意志を紹介してもらい、「閑上中学校」で町の中に震災の記憶を留める大切さを教えて頂き、「閑上まちカフェ」で町の未来について夢を語って頂い



写真4 閑上まちカフェの外観

た。

日本に住む限り、自然災害から逃れることは難しい。その様な中で、「全体を見渡す目を持って地域が自立すること」、「過去の事実と正面から向き合った上で未来の夢を語ること」の大切さを改めて教えてもらった。言葉で言うとは簡単になってしまうが、レジャー・レクリエーションの側面からより良い環境をつくと共に、人と人との繋がりを作り出していくことは、非常に大切だということが改めて身にしみる地域研究であった。

この様な現実を正しく理解した上で、それに向き合いながら、レジャー・レクリエーション学会がどの様に震災復興に関わっていくべきなのかを、我々はまだまだ考え続けなければいけない。